エッセイ

言葉の影響力

木場　弘子

随分と後になって言葉の持つ影響力を再認識したことがある。それは、中学時代の部活の顧問の先生の言葉だった。当時、私はバスケットボール部にいた。決してスポーツ万能だったわけではなく、当時の私は性格は内向的で人前で話すのが苦手。おまけに、帰国児童で勉強も遅れがち。何事にも自信が持てない子だった。

二年生になったとき、その先生が部員を集め、こう言った。「二年生には積極性と責任感を持ってもらうため、各委員会の委員長に立候補するように。」とても厳しい先生だったので、私はやむなく、所属の広報委員長となった。

しかし、元々放送には興味があったので、委員長となってからは、昼休みの番組を企画したり、アナウンスをしたり。役職が人を作ると言うが、段々と取り仕切ることの楽しさを覚え、それが今の仕事のきっかけになったように思う。その秋、先生はＮＹの日本人学校へ行ってしまい、それ切りとなっていた。

ところが、数年前に偶然にお会いしたのだ。講演に出かけると、主催の教育委員会の中にその先生が。名刺を交換しても四半世紀の時のせいで、お互い気づかず。しかし、どこかで見た顔、見た名前。もしかして……。大興奮の再会となった。そして、私が当時の先生の命令に感謝していることをお伝えすることができた。しかし、先生は中々、そのことを思い出せない。やっと、思い当たったのだが、先生からは意外な答えが返ってきた。「当時は非常に部員数が多く、全員が出てくるとコートが窮屈で練習にならなかったんだ。だからせめて二年生が委員会で忙しくなって出席率が下がればと思ってさ。」

照れ隠しにも思えたが、本当に驚いてしまった。指導者からのちょっとした言葉で、私のようにその後の人生に影響が出ることがある。だからこそ、人への言葉は重い。言葉は人に希望を与える魔法でもあり、反対に凶器でもある。人をやる気にさせるのも、どん底につき落とすのも言葉なのだ。

千葉大学教育学部で未来の教師たちに「教育と表現」という講義をして七年。学生のスピーチへの批評には神経を使う。「先生はどんな子にも興味を持って、良い点を探そうとしている。」つい最近学生に言われ、嬉しかった。人の心に意欲の灯をともす。そんな言葉かけができる教師に是非、学生にはなって欲しいのだ。

きば　ひろこ　キャスター・千葉大学特命教授。一九八七年、千葉大学教育学部を卒業後、ＴＢＳ入社。在局中はスポーツキャスターとして活躍し、九二年フリーランスに。内閣府規制改革会議をはじめ省庁の委員を多数務める。浦安市教育委員。